

『イエローダイアリー―狂想曲』

櫻井

秀樹

【あらすじ】

結城修二（28）が帰宅すると、ベビーカーに赤ちゃん置き去りにされている。そこには一緒にメモが残され、赤ちゃんの父親の可能性がある男たちの名が記されていた。勿論、結城もその一人だった。

疚しい気持ちを胸に参集する結城と三上、江口。二年ほど前の関係が要因で呼び出された男たちは、戸惑い責任転嫁をするばかり。当然のようにDNA検査の手続きを取らざるを得なかった。

検査結果が出る日、男たちの他に、母親の亜弥の親友である友紀を呼び出し、ことの真相を掴もうとするが、そもそも赤ちゃんを置き去りにした本人が友紀であったことが分かる。憤慨する男たち。仕方なかったと開き直り、寧ろ男たちを責め立てる友紀は、次第に三上と口論に発展する。詰まらない男と女の闘ぎ合いが展開される。

そんな時、亜弥から連絡が届き、彼女の到着に気を揉む面々。それは責任から逃れられるからに他ならなかった。

亜弥が到着すると安堵の表情の面々。三上と江口は、誰が父親なのかハッキリせずにその場を立ち去ろうとするが、それに怒った友紀とまたくだらない口論が始まる。

すると、偶然居合わせた女子高生の未央が突然キレ始める。大人げない会話が漏れ伝わっていたのだ。しかし、寧ろ大人たちに反論を受ける未央、思いがけないことに言い返せない。大人たちの追求に耐えきれなくなり、気持ちをぶつける未央。それに触発されたのか、亜弥も今回の経緯を話し始める。すると、自然と自分の内なる心の痛み、叫びをぶつけ合う面々。それぞれが何かを背負って生きてきたのだ……。

DNA検査が届き開ける前に、自分が父親になるうかと、提案する結城であったが、彼の背負っているモノから、それを拒絶する亜弥。黄色い手帳もその場に捨てて行く亜弥の背中を見送る結城は、検査結果を見ないで捨て、帰路につくのであった……。

【登場人物表】

結城修二	(28)	会社員
三上潤	(36)	会社員
江口誠	(32)	会社員
本間友紀	(26)	美容師
小西未央	(17)	女子高生
藤田亜弥	(26)	エステティシャン
喫茶店のマスター		
赤ちゃん		
他		

○ 結城家・外観（夜）

○ 同・玄関先（夜）

結城修二（28）が帰ってくると、玄関先にベビーカーとトートバッグが置いてある。

結城「！……！」

ベビーカーには、赤ちゃんがスヤスヤと寝ている。

トートバッグには、ほ乳びんやおむつと一緒にメモが入っている。

○ タイトル『イエローダイアリー―狂想曲』

○ ある喫茶店・外観（日替わり・夜）

○ 同・中（夜）

疎らな店内、BGMにクラシック音楽が小さく流れている。

時間を気にした結城と傍には、ベビーカーに赤ちゃんが寝ている。

三上潤（36）が入ってきて、結城のテーブルにくる。

三上「あんたが、結城さん？」

結城「はい、わざわざすみません」

三上が結城の向かい側に座り、マスターに、

三上「コーヒーお願いします」

マスター「かしこまりました」

三上「ホントだったんだね、あの話」

結城「ええ、残念ながら」

三上「あいつ何考えてるんだろうね、子供を置いていくなんて。連絡つかないの？」

結城「はい、何度も携帯に電話しているんですけど」

三上「それで、もう一人は？」

結城「まだ来ていないんですよ。江口さんっていうらしいですけど」

三上「そう。……ああ、そうだ」

と、名刺を出す三上。

三上「三上です。お互い素性をはっきりして

おいた方がいいでしょ？」

結城「（受け取って）そうですね」

と、名刺を出す結城。

三上「（受け取って）結城さん。保険屋さんなんだね」

結城「はい。三上さんは大手の貿易会社なんですね。スゴいっすね」

三上「大したことないよ。大手は大手で色々大変だね」

結城「でも、どうしたモンですかね」

すると、三上が赤ちゃんを見てから、

三上「メモ、あるんだよね」

結城「あ、はい」

すると、結城がメモをポケットから取り出し、三上に渡す。

三上「（読んで）このコの父親だと思われる人の名前と携帯番号です。解決して下さい。……なんだコレ？」

結城「玄関先に、置いて行かれた身にもなつて下さいよ」

三上「（フツと笑って）そうだな。犬や猫じゃあるまいしな。……しかし、もう一人は何やってんだ？」

結城「あ、電話してみます」

結城が携帯で電話を掛けると、一つ離れたテーブルの携帯電話が鳴る。

結城・三上「！……」

三上「ちよつと、一回切ってみて」

結城「はい（と携帯電話を切る）」

一つ離れたテーブルの、携帯電話の着信音がやむ。

結城と三上が、そのテーブルの方を見る。

テーブルには、江口誠（32）がいる。

江口「あ、どうも江口です」

と、調子よく頼んでいたコーヒーを持って、結城たちのテーブルに移動して三上の隣に座る。

三上「あんた初めから、分かっけて聞き耳立てていただろ？」

結城「分からないわけじゃないですよ。ベビー

カーに赤ちゃん乗せてくるって、言いましたよね」

江口「まあ……」

三上「卑怯な真似するなよ」

江口「だって、しようがないじゃないですか。

詐欺かもしれないんだから」

三上「詐欺なのか？」

結城「んなわけないですよ。だから、赤ちゃん置いて行かれた身にもなって下さいよ」

マスターがチラッと結城たちを見ている。

結城「それに二人だって、身に覚えがあるから、今日ココに来たんじゃないですか？」

三上「そりゃ、そうだけど……」

江口「来なかったら、家族とか周りにバラすなんて言うから」

結城「そう言わなかったら、しらばっくれて、来ませんでしたよね」

三上「（フツと笑って）まあ、そうだな」

江口「あ、開き直っちゃうんですか？ それ

なら俺も絶対に来なかったですね。二、三ヶ月付き合ったみたいな関係ですし」

三上「俺は付き合ったとかいう、関係ではなかったしな」

江口「え!?! じゃ、付き合ってもいないのに、そういう関係になったんですか？　なんだよ、あの女」

三上「結城さんは？」

結城「ちゃんと付き合っていましたよ」

江口「どのくらい？」

結城「三年ほど」

江口「そんなに？」

三上「じゃ、結城さんの子供ってことでいいんじゃない？」

江口「そうですよね」

結城「なんですですか？　もう別れて二年も会っていないし、なにより付き合った長さよりも、誰の遺伝子を受け継いでいるかってことが大事でしょ？」

三上「そこはさ、この際目を瞑らない？」

江口「そうですね。愛情の深さっていうのが、大事なんじゃないですか？」

三上「そうそう三年も付き合ってたんですから。

それにどこことなく、口元なんて結城さんに似てるでしょ？」

ベビーカーで寝ている赤ちゃんの寝顔。

マスターが三上にコーヒを持って来る。

マスター「(配って)コーヒーです(と行く)」

三上「あ、すみません」

江口「でも、確かにそうですね」

結城「そんなこと言ったら、鼻なんて三上さんに似ているじゃないですか？」

江口「あ、ホントだ」

三上「何、言っているんだよ。(江口に)そして、目なんてアンタにそっくりじゃないか？」

結城「あ、確かに」

江口「(思わず大きな声で)寝ているのに、分かるわけないでしょ？」

三上「大きな声出すなよ。起きちゃうだろ」

結城「僕は起きているときの目元を知って
いますからね。お二人と違って」

江口「（フツと笑って）……」

三上「てゆーかさ、このコどうやって預かっ
てんの？」

結城「日中は預けてます。急に預かってくれ
る所を捜して」

江口「じゃ、夜は？」

結城「家で」

三上「一人暮らしなの？」

結城「いえ、実家です」

江口「それじゃ、親とかに何ていいわけして
んの？」

結城「友達の夫婦がインフルエンザにかかっ
て、夜は他に預ける所がないからって」

三上「なるほど、言い訳としては成立してい
るよね」

江口「でもそれじゃ、長くて一週間ぐらいで
すよね」

三上「早く解決しないと。そうそう預かって

もいられないでしょ？」

結城「はい。それとお金のことなんですけど。折半ですからね。DNA検査代もそうですけど」

江口「え、マジで？　どの位ですか？」

三上「それさ、考えたんだけど。取り敢えず結城さんが立て替えてくれてさ、DNA検査結果出たら、全部そいつが清算ってことでいいんじゃない？」

結城「じゃ、それでいいですか？」

江口「お金と子供付かってことですか？」

三上「子供にお金付かってことだよ」

結城「そういうことをお願いしますね」

江口「でも、もう一人男いるんですよね」

結城「ええ、でも携帯の番号が替わっているみたいだし、所在も掴めませんから」

江口「そんな時は、どうするんですか？」

結城「お金は折半ということはどうですか？」

江口「マジっすか？」

三上「それはしかたないんじゃないの。この

コが自分のコじゃないっていうだけ、マシ
だろ？」

江口「そっか。……じゃ、その時はこのコ
どうするんですか？」

結城「……」

三上「母親捜すか、施設に送るか」

江口「それでいいんですか？」

三上「何？ 罪悪感あるの？ だったら、自
分のコとして、育てれば？」

江口「出来るわけないじゃないですか？」

三上「結城さんは？」

江口「そうですね。三年も付き合った元カノ
のコなんですから。自分が育てようなんて
気持ちないんですか？」

結城「そんな状態にないんですよ」

江口「この二、三日預かったから、情が沸い
ちやっただんじやないんですか？」

結城「それは可愛いとは思いますが」

江口「じゃ……」

三上「(遮って)それとこれとは別だろ？ そ

んなんだけで、子供なんて育てられないだ
ろ？」

江口「もしかして、子持ちですか？」

三上「悪いか？」

結城「幾つぐらいですか？」

三上「中一と小五」

江口「（フツと笑って）じゃ、不倫だったんで
すね」

三上「うるせーな。（江口に）あんたも一緒に
たいなモンだろ？」

江口「違いますよ。俺はまだ結婚していませ
んから。三上さん、子供は二人も三人も一
緒っていうじゃないですか？」

三上「んなこたないよ。仮にDNA検査した
って、自分のコとして認知なんて出来るわ
けないよ」

江口「あ、また本音出した」

三上「（江口に）お前はどうかなんだよ。人のこ
と責めやがって」

江口「逃げられるモンなら、逃げたいですよ」

三上「(フツと笑って)一緒じゃないか。それにさあ、急に二年前に関係を持ったキャバ嬢の子供が自分のコかもしれないって言われてさ、今日来なかったら、探偵でも使つて、居場所特定して、家族とか会社にバラすからって、言われた気持ちわかるかよ」

江口「俺もそうだったんですよ。この結城さんに。!?……結城さん、どうしました？」

結城「亜弥つて、キャバ嬢だったんですか？」

江口「え、知らなかったんですか？俺もキヤバラで出会ったんですけど。源氏名はミサキだったかな」

三上「じゃ、何て聞いていたの？」

結城「エステテイションで……」

三上と江口が思わずクスクスと笑う。

三上「ま、シヨックだわな。しかも別れ際なんて、こんな破天荒だったわけだろ？」

江口「ま、そう気を落とさないで。別れたんですから良かったですよね」

三上「あんまフオローになっていないだろ。」

しかも、子供置いて行かれたんだから。笑
えねーし」

江口「そのコの親かもしれないって、伝えられた俺たちも笑えないっすよね……」

三人とも溜息をつく。

すると、マスターが来て、

マスター「コーヒーのお代わり如何ですか？

何かと込み入っているようですけど」

江口「どうしたら、いいと思いますか？」

マスターが赤ちゃんに視線を移してから、

マスター「ん〜、軽々しくお答えできません

よね」

結城と三上、江口が思わず笑ってしまう。

三上「ですよね。(江口に)何、聞いてんだよ」

マスター「おかわり如何致しますか？」

江口「俺、早く帰らないといけない立場なの

で」

三上「どんな立場だよ」

結城「それじゃ、……」

と結城が、バッグからDNA検査キット

を取り出す。

結城「じゃ、何か綿棒みたいなので、口の粘膜を十五秒くらいかいて下さい」

と、三上と江口に検査キットを渡す。

結城「知り合いのお医者さんに聞いてみたら、医者のルートで無理矢理頼んだら、すぐに結果出るみたいなので、二、三日待って下さい」

江口「結城さんは、医療関係に仕事してるんですけどっけ？」

三上「保険屋さんだよ」

結城「いいえ、ちよつとした知り合いで、こんなこと聞ける人いなかったんで、話してみたら手配してくれるみたいで」

江口「へえ、そうなんだ……」

検査キットを口腔内に押し当てている結城と三上、江口。
その様子を見ているマスター。

○ ある保育所・外観（日替わり・朝）

○ 同・中（朝）

保育所のスタッフに赤ちゃんを預けている結城。

結城「それでは、宜しくお願いします」

スタッフ「はい、それで今日も夕方の六時までで、宜しいんですね」

結城「なるべくその時間までには、来たいと思っています」

スタッフ「宜しくお願いします。延長の場合には、なるべく早めをお願いしますね」

結城「わかりました」

○ ある銀行・ATMコーナー

ATMコーナーからお金を下ろしてくる

江口、

江口「……」

明細書を見ながら溜息をつく。

○ ある遺伝子研究所・外観

○ 同・中

受付の研究員に、提出資料を渡している

結城。

研究員が提出資料の中身を確認しながら、

研究員「田中先生のお知り合いですね」

結城「はい。出来るだけ早く結果を知りたい

んですけれど」

研究員「窺っております。結果は直ぐに出ま

すが、電話で口答でも宜しいですか？」

結城「いえ、報告書のような形でお願いした

いのですが」

研究員「そうすると、事務手続き上、数日か

かりますので」

結城「窺っております。出来たら、バイク便

でお願い出来ますか？」

研究員「わかりました。それではお預かりし

ます。結果が出来ましたら、ご連絡致します

すので……」

○ ある公園・中

江口がベンチで市販の弁当を食べている。
頻りに携帯電話を気にしている。

○ 結城家・外観（夜）

○ 同・リビング（夜）

結城がソファで赤ちゃんに、ほ乳びんで
ミルクをあげている。
勢いよく飲んでいる赤ちゃん。
その姿を微笑ましく見ている結城。

× × ×（時間経過）

結城が携帯電話を掛けている。

結城の傍らで寝ている赤ちゃん、結城の

左手の小指を握っている。

結城「あの、急にお電話してすみません。藤

田亜弥の、友人の結城って言います……」

○ ある喫茶店・外観（夜・日替わり）

T | 三日後。

三上の声（先行して）「それで結果は？」

○ 同・中（夜）

テーブルにいる結城とその向かい側に、
三上と江口。

結城の傍らにトートバッグと、ベビーカ
ーには起きている赤ちゃんがいる。

結城「それがまだ届かなくて。きちんとした
書面にしてもらったから。口答よりもそつ
ちの方がいいですよね」

三上「説得力が違うからね」

江口「確かに。口答じゃあ、結城さんが都合
いいように出来ますしね。信用性にかいま
すよね」

結城「そんなことしませんから。バイク便で
ここに届けて貰えるように手配したので。
もう少しで届くと思うんですけど」

江口「じゃ、待ってなきゃいけないの？」

結城「暫くは。それと亜弥の友達に電話して、
この件を知っていそうなコに、来て貰える

ようになったんで」

江口「そうなの？」

結城「ええ。結局、DNA検査の結果が出ても、誰かがその後のことを、考えなければいけないくなるわけじゃないですか？」

三上「そうだよ。母親どうにかして見つけてくれないと、俺育てる気ないからな（フットと笑う）」

江口「赤ちゃんの目の前で、なに言ってるんですか？」

三上「じゃ、自分はどうなんだよ。育てられんのかよ」

江口「そんなことは、言っていないじゃないですか」

三上「じゃ、なんなんだよ。綺麗事ばかりいいやがって」

江口「赤ちゃんに聞こえるでしょ？」

三上「聞こえても、理解できてねえーよ。話

せもしないんだから（赤ちゃんに）ねえ？」

それに微笑み返す赤ちゃん。

三上「（江口を指さして、赤ちゃん語で）この人がパパでちゅかく？」

と、赤ちゃんがキヤツキヤ、キヤツキヤと反応する。

三上「じゃ、そういうことで……」

江口「（大きい声で）何、言ってるんですか？んなことになるわけないでしょ？もういいかげんにして下さいよ」

結城「声が大きいですよ」

三上「単純だな、お前は」

と、マスターがコーヒーを運んでくる。

マスター「今日も込み入った話ですか？」

結城「ええ。なんかすみません。あんまり聞かれたくないような話なんですけど」

マスター「それじゃ、今日は店仕舞いしてしまいまししょうか？ 他のお客さんもいませんし」

結城「いいんですか？」

マスター「雨も降ってきたようですよ、体調も優れないので、今日は早めに店を閉めて

しまおうと、思っていたんですよ」

三上「大丈夫ですか？」

マスター「ええ」

結城「なんか、すみません。気を遣わせてしま

まって」

マスター「それじゃ、CLOSEしてきますね」

と、マスターが入口のドアまで行き、プラカードをCLOSEにしようとすると、少し雨に濡れた本間友紀（26）が入ってくる。

マスター「いらっしやいませ」

友紀「あ、待ち合わせなんです」

マスター「それでは、あちらにどうぞ」

友紀「ありがとうございます。あと、コーヒ

ーをお願いします」

マスター「かしこまりました」

マスターがまた、プラカードをCLOSEにしようとすると、結構濡れた制服姿の小西未央（17）が入ってくる。

マスター「今日はもう……」

と言いかけるが、それをやめる。

未央の髪が濡れている。

マスター「それではどうぞ。カウンターの席にでも。奥からタオル持って来ますので」

と、マスターが奥の部屋へと向かう。

未央がカウンターの席に座る。

友紀が少し濡れた上着を脱ぎ、結城の隣に座る。

友紀「遅くなりました」

結城「こちら、本間友紀さんです。亜弥の親

友だったの思い出して、連絡してみました」

三上「あ、ナオミ？」

友紀「それは源氏名です」

江口「あなたもキャバ嬢なの？」

未央「！」

友紀「美容師です」

マスターが未央に、タオルを渡している。

江口「美容師兼キャバ嬢ってこと？」

友紀「言い方にもよりますが」

未央がタオルで髪を拭いている。

三上「まんまだろ？」

友紀「副業です。こっちだって好きで、おっ
さんにお酒注いでいるわけないでしょ？」
三上「はい!？」

江口「来てそうそう、きついこと言うね」

結城「それぐらいにして、本題に入りませ
んか？ そんな話をする前に、もっと建設的
な話をしましょうよ」

友紀「やっぱり結城さんに預けて良かった」

結城・三上・江口「!？」

友紀「私なんですよ。赤ちゃんを結城さん家
の前に、置いて行ったの……」

結城「……」

江口「どういうこと？」

○ 結城家・玄関先（夜・友紀の回想）

トートバッグを肩にかけた友紀が、結城
家から少し離れた、電信柱の影に隠れて
いる。

傍らにはベビーカーがあり、赤ちゃんが
そこで寝ている。

すると、向こう側から結城が帰って来る。

友紀「！」

すかさず、友紀が玄関先にベビーカーを移動させて、傍らにトートバッグを一緒に置いて、結城が来る反対側の方へと早足で逃げて行く。

○ ある喫茶店・中（夜・友紀の回想戻って）

未央がタオルで髪を拭いている。

結城「……」

三上「お前、なんちゆうことするんだよ」

江口「このコが置き去りにしたの？」

友紀「一時、預けただけです」

結城「このコは、誰のコなの？」

友紀「亜弥のコですよ。私のコじゃないですよ。私が一週間前に預かったんだけど、三日経っても引き取りに来ないし、連絡もつかなくなってる」

三上「お前、ヒドくないか？」

友紀「だって、しょうがないでしょ？ 私だ

って仕事あるし、もうどうしようもなかつたんですよ」

江口「それでもね……」

友紀「当たれるだけ、当たったんですよ私だって。それで結城さんのこと思い出して」

結城「それだったら、一声かけるべきじゃない？」

友紀「それはゴメンなさい。でも、そうしたら、快く預かりました？」

結城「……」

三上「それは無理だろ」

江口「はつきり言いますね」

三上「（江口に）じゃ、自分はどうなんだよ」

江口「……その時になってみないと」

三上「いい人ぶるんじゃないよ。お前なんて、しらばっくれて、逃げるタイプだろ？」

江口「そんなことないですよ。そういう選択肢もあるでしょうけど」

友紀「やっぱり、この二人に預けなくて良かった」

三上「こっちだって、預けられなくて良かったと思っっているよ」

すると友紀が、バッグから黄色い日記帳を取り出す。

江口「何、それ？」

友紀「あなたが江口さん？　会うたんびに、Hする男」

江口「はい!？」

友紀「コレ、亜弥の二年前の日記帳なんですけど、簡単にその日の出来事とスケジュールが書いてあるんです」

結城「それで？」

友紀「ちようど結城さんと上手くいかなくなった、二ヶ月前から目の前にいる男たちと、関係を持ち始めたようなんですよ」

マスター・未央「……………」

三上「ちゃんと名前で言えよ」

結城「別れる二ヶ月前からだっただんだ……………」

江口「（微笑んで）なんかすみません」

友紀「悪気はなかったみたいなの、対応してる

んじゃないよ。ヤルことやっついて」

江口「そういう言い方は、ないんじゃないですか？」

三上「お、いいぞ。もつと抵抗しろ」

友紀「（三上に）あんたも一緒よ」

三上「何がだよ」

友紀「しらばっくれるんじゃないよ。あんたら似たモン同士。会うたんびにヤッてたでしょ？」

三上「女の口から、なんちゆう下品な言葉が出るモンだね。大体どこに、そんな証拠があるんだよ」

江口「証拠もないのに、人を卑下するような発言は控えて欲しいものですね」

友紀「証拠うんぬんって、言い出すヤツって、たいがい疚しいことあるんだよね」

三上「（江口に）そんなことないよな」

江口「そうですよ」

結城「（友紀に）どうなの？」

友紀「証拠ありますよ」

三上「嘘だろ？ カマかけてんだろ？ だいたいガールズトークとかいうので、聞いたことあるだけの話だろ？」

江口「そんなことに、何の信憑性があるんでしようね」

友紀「じゃ、コレ見なさいよ」

と、友紀が日記帳を開いてみせる。

結城と三上、江口がそれを覗き込む。

友紀「これでも、シラばっくれるの？」

三上・江口「……」

友紀「この三上、生とかってなんなの？」

三上「はあ!？」

友紀「この江口、生ってのはなんなの？」

江口「生っていうのは……」

三上「生ビール飲んだってことかもしれないだろ？」

結城が思わず笑っている。

友紀「じゃ、この三上、コっっていうのは？」

三上「それは……コーラ飲んだ日ってこ

とじゃ……」

友紀「(遮って)馬鹿じゃないの？ 一緒に生ビールとコーラ飲んだ日を、日記帳に書いておく女がいるわけないでしょ？ 生でヤッタか、コンドームつけたかだろ？」

思わず吹き出すように笑い出す、三上と江口。

マスター・未央「……」

三上「そう熱くなるなよ」

友紀「ホント、サイテーな男」

日記帳を覗き込んでいる江口。

江口「てゆーか、三上さん、既婚者のくせして、このコ、生、生ってなんなんですか？」

それに笑ってしまう、結城と三上。

三上「お前だって、そうだろ？ 生×五ってなんなんだよ。どんだけ絶倫野郎だよ。盛りをついた高校生じゃあるまいし」

江口「(笑いながら)面目ない」

友紀「あんたたち、反省の一つもなんだね。」

結城さんだって、よく笑っていられますね」

結城「……」

江口「でも、結城さんって、亜弥が浮気し始めてから、一度もそういうことになっていないんじゃないんですか？」

三上「冷え切っちゃってたんだね」

友紀「いえ、別れた最後の日に」

と、日記帳のある部分を指さす友紀。

江口「あ、ホントだ。お別れHしてる」

三上「あく、惜しくなっちゃったんだね。それ男の性ね」

江口「割の合わないことしちゃいましたね」

三上「それで該当者になっただんだね」

結城「……」

江口「でも、そういえばもう一人いたんじゃないか？」

三上「そうだよ。第四の男は？　そいつの情報はどうなってるんだよ？」

結城が日記帳を見ながら、

結城「この池田っていう男は？」

友紀「結城さんには言いづらいんですけど、亜弥、実はこの人と結婚したんですよ」

結城「！……」

三上「お前、そういう大事なことは始めに言えよ。ふざけんよ」

江口「それじゃ、話がかわってくるじゃん。この池田の籍に入っているんですよね。この赤ちゃん」

結城「じゃ、なんで俺ンとこに？」

友紀「それが……（と口籠もる）」

三上「説明しろよ。俺らばかり罵りやがって」

友紀「旦那さんと上手くいかなかったらしく、しかもこの事がバレたらしくて」

結城・三上・江口「……」

友紀「それと、なんかテレビで、一年間自分のコとして養育したコは、仮に遺伝的に自分のコではないと分かったとしても、それ以降離婚したとしても、養育費を払い続けなければいけないっていう、民法があるらしくて」

三上「なんじゃ、それ？」

江口「そんな法律、可笑しいだろ」

三上「国会議員は、なにやってるんだよ。さつさと法改正しろよな……」

江口「それが本当だったら、ホントそうですよね」

結城「それで？」

江口「（小声で）うわぁ、結城さん冷静」

友紀「私も詳しくは聞いていないんですけど、そんなこんなで、DNA検査もしないで、出て行っちゃったらしくて」

三上「それは逃げ得だって考えたからだろ」

江口「関係が破綻した後だったら、そういう行動とるのも選択肢の一つでしょうね」

結城「それで旦那さん捜しに行ったきり、連絡ないの？」

友紀「はい」

結城「あいつも逃げたってこと？」

三上「そして、ナオミも置き逃げして」

友紀「ナオミは源氏名です」

江口「でも、この三人は選ばれなかったんで

すよね」

友紀「そうですね。向かい側の二人は論外としても、結城さんはちゃんと付き合っていたのにね」

江口「論外つてのは、余計だけど、ホントそうですよ」

友紀「てつきり、結城さんと結婚すると思つてた。何かあったんですか？」

結城「ええ、まあ……」

三上「言いたくないことだつてあるだろ。そういう男と女の野暮な話を聞くなよ」

江口「そういうことに首突っ込まなくてもね」

結城「……」

友紀「だいたい男がはつきりしないから、面倒臭いことになるんじゃないですか？」

三上「男と女は違うんだよ」

友紀「そういうこと言つて、なんでも済ませようとする」

江口「（結城と三上に）んなことないですよ
ね？」

友紀「そうじゃん。今回だって、いいように体目当てなだけだったんでしょ？」

三上「なんちゆうこと言うんだよ。ま、仮にそれでも絶対認めてやんねえけど」

江口「（フツと笑って）こっちだって、こんなことに巻き込まれてもね」

三上「自分だって、好き放題ヤツといて、そのツケがまわってきた結果だろ？」

友紀「自分たちだって、そうじゃない？ 自分たちに責任がないって思っているの？」

あんた方が女を弄んだんじゃない？」

三上「そういう時だけ、弱い立場にまわるんじゃないよ。そっちだって、やりたくてやってたんだろ？ お互い様だろ？」

友紀「だいたいそんなことを思っている男って、Hが下手くそなんだよね。女は気持ちいい、イッたフリしてやってんのに（と鼻で笑う）」

三上「お前今、世界中の男を敵に回したぞ」
友紀「そういう男が居るから、世の中から戦

争がなくならないんだよ。そうやって自分の否を認めないで、都合のいいことばっかり主張して、なんでもかんでもああいえば、こういうみたいに……」

マスター・未央「……」

三上「それはさ、お前だってそうだろ？」

友紀「あんたみたいな、最低な男に、おまえ呼ばわりされる筋合いないんですけど」

三上「キャバ嬢のくせに、生意気な口聞くんじゃねえよ」

友紀「（また鼻で笑って）そんな女たちに、煽てられて、お金払っていく、馬鹿な男のくせして」

三上「楽しんで、金稼ぎやがって」

友紀「馬鹿な男の相手をしなくちゃならないのって、そう楽なことじゃないんですけど」

三上「はあ？ キャバ嬢がなに言ってるやがんだ」

友紀「私はあくまで、美容師です」

結城「（大きい声で）もういいじゃないですか。

そんな言い合いしたって、何も解決しませ
んよ」

マスター・未央「……………」

すると、友紀の携帯電話が鳴り、不機嫌
に電話に出る。

友紀「はい……………亜弥？」

結城・三上・江口「！」

○ ある駅・構内（夜）

藤田亜弥（26）が、携帯電話を掛けている
後ろ姿。

○ ある喫茶店・外観（夜）

雨足が早くなっている。

○ 同・中（夜）

コーヒーのお代わりを、それぞれに注い
でいるマスター。

三上「あいつ、おせーじやないかよ」

江口「また、逃げたんじやないですよね」

紀の手を掴もうとしている。

友紀がそれを軽くあしらうように、人差し指で赤ちゃんをあやしてあげる。すると、また入口のドアが開く。

亜弥が入って来る。

友紀「亜弥……」

ホツとした表情の男たち。

三上「もう帰っていいのか？」

江口「そうですね。母親が戻ったワケですし」

結城「……」

友紀「そんなワケにはいかないでしょ？」

三上・江口「はぁ!？」

友紀「父親は、はっきりしないと」

三上「はっきりして、どうするんだよ。これ以上、煩わしいことするんじゃないよ」

亜弥「なんで、このメンツが集まってんの？」

亜弥と目を合わせようしない結城。

友紀「何でって、池田さんとどうなるかわからないけど、父親の件はどっちにしるはっ

きりとしなければいけないんじゃない？」

亜弥「それでね……」

と亜弥が、赤ちゃんが居ることに気がつき、駆け寄り抱き上げる。

亜弥「元気だった？」

母親と気付いて安心したのか、急に泣き出す赤ちゃん。

顔を顰める三上と江口。

亜弥「大丈夫、大丈夫。ママ戻ったからね」

と、あやすがなかなか泣きやまない。

亜弥「(マスターに)すみません。トイレ、お

借りできますか？」

マスター「どうぞ、あちらです。(と手をのばす)でも、如何なさいました？」

亜弥「あの、おっぱいあげようと思いましたがマスター「それでは、こちらにどうぞ」

と、奥の部屋へと促すマスター。

亜弥「あ、すみません(と奥の部屋に行く)」

江口がチラリと腕時計を見る。

結城「何か他に、予定でもありますか？」

江口「いや、ちよつと遅くなると困るんですよ」

三上「俺だって、一緒だよ」

友紀「あんたたち、文句ばかり言っているよね。少しは我慢とか出来ないの？　子供じゃあるまいし」

三上「お前が我慢して、ただ預かっていたら、こんな思いをすることもなかったんだよ」

江口「そうですよ。こっちがどんな思いして、三日間待ったと思ってるの？」

結城「やめましようよ」

三上「いや、こいつは分かっていないんだよ。二年も前のことで急に呼び出されて、どんな思いで、今日まで過ごしてきたと思っているんだよ。生きた心地しなかったよ」

マスター・未央「……」

友紀「そんなこと知るわけないでしょ？　私には関係ないし、だから、身から出たサビじゃない？」

三上「だから、うるせーんだよ。いちいち気

に障ること言いやがって。だいたいお前は部外者なんだから、少しは黙ってらんないのかよ」

江口「そうだよ。なんかエラそうに、上からいちいち言うなよ」

友紀「あんたまで、本性出したわね」

江口「そういうのが苛々すんだよ」

未央「あゝ、もうやめてよ……」

と、未央が立ち上がる。

キョトンと未央に視線を向けている一同。

友紀「え、なんなの？」

結城「あ、うるさかったですか？」

と、未央が結城たちのテーブルまで来て、

未央「さつきから、なんなんですか？ 誰が

父親だとか、責任の追っつけあいして、恥ずかしくないんですか？」

マスター「……」

江口「何？」

三上「部外者の女子高生が、なぜそんなに怒ってるの？」

結城「なにか気に障ったんなら、謝るけど」

友紀「ゴメンね。馬鹿な男たちにイラついたのよね？」

三上「誰が、馬鹿な男だよ」

江口「そうですよ。(三上に)もう帰りましょ
うよ」

三上「そうだな」

未央「何にも解決していないじゃないですか？
お互い好き放題主張するだけで」

友紀「私も、その通りだと思うよ」

江口「もういいじゃないですか。母親が戻っ
たんですから、一件落着でしょ？」

三上「(未央に)だいたいキミは、何に怒って
るんだ？ 何か他の人にでも、言いたいこ
とがあるんじゃないのか？」

未央「……」

結城「やめて下さいよ。女子高生相手に、そ
んなこと言わなくても」

江口「そうかな。俺も何かそう思うんだけど、
ちよっと話聞いたぐらいで何、熱くなって

んの？」

三上「女子高生なんて、たいした悩みないだ
ろ？」

友紀「そんなことないですよ」

三上「じゃ、お前は今と高校の頃と一体どっ
ちが、悩み多いんだよ」

友紀「そりゃ、今の方が。高校生の頃の悩み
なんて、振り返ってみれば可愛いモンでし
たけど。結城さんだってそうでしょ？」

結城「ま、今に比べたらそうですけど、高校
生の頃は高校生なりに悩みあったですよ。

高校生の頃は、学校生活がほぼ全てなんで
すから……」

友紀「（未央に）何か悩みとかあるの？」

三上「どうせ、受験とか、男関係とかじゃな
いの女子高生なんて」

未央「知ったようなこと言わないで下さいよ」

三上「はあ!?! 目上の人間に向かって、なん
なんだ、この女子高生は」

江口「少し前に話題になった、いじめとかじ

やないですか？　女のいじめって、陰湿で
すモンね」

未央「……」

三上「いじめにでも、あつてんのか？」

結城「そんなこと、聞かなくてもいいじゃないですか？」

江口「死んだりしちやダメだよ。アレって、
周りにエライ迷惑かかるんだから」

三上「そうだよな。自分のことばかり考
えないで、その後のことも考えろって、言
いたいよな」

結城「そんな話しなくても、いいじゃないで
すか？」

三上「一般論よ、一般論。そう思わない？　（友
紀に）どうよ女としては？」

友紀「まあね。女の人間関係は複雑だからね」

三上「そんなモンだろ？　苛々していること
って？」

未央「わかった風なこと言わないでよ。テレ
ビのちやちなコメンテーターや評論家みた

いなこと言っ。昔の人が……

三上・江口・友紀「はあ!？」

マスター「(フツと笑っ)……」

結城「そんなこと言わなくても、いいんじゃない?」

未央「だいたいあなたは元カレなんだから、あなたがしつかりさえしておけば、彼女も浮気とかしなかつたんじゃないですか? そしたら、こんなことにもならなかつたでんですよね」

結城「……」

フツと笑う三上と江口、友紀。

マスター「……」

三上「お前はなんちゆうもつともなことを、言っってくれるんだ」

江口「凄いな女子高生」

未央「(結城に)あなたがいい人ぶっているから、この人たちが言い逃れようとしてるのを、助長してるんですよね」

三上「この際さ、結城さんもぶっちゃけよう

よ。一人いい人ぶらないでさ」

江口「言いたいこと言ったら、いいんだよ」

結城「俺は、特に……」

友紀「はつきり言いなよ」

未央「……」

三上「（未央に）じゃ、女子高生お前はどうかんだよ。人にばっかりいいいたいこと、いいやがって。お前がまず言ってみろよ」

亜弥が奥の部屋から出てきている。
抱っこされた赤ちゃんは、すっかり寝ている。
いる。

未央「学校で、無視されてんの……」

○ ある高校・教室内（未央の回想）

昼休み中の教室内。

皆が話したり、机をくつつけたりして、
各々が楽しそうにお弁当を食べている。
机で一人だけお弁当を食べている未央。

未央の声「（続けて）男関係で揉めて。友達が好きだって言ってた男が、私のことが好き

みたいなきずが流れて。私の何が悪いの？
そんな男のことなんとも思っていないのに。
何で私が友達のことを裏切ったってことにな
ってんの？ 私がそそのかしたみいにな
ってき……」

○ ある喫茶店・中（夜・未央の回想戻って）

結城・三上・江口「……」

友紀「女って、そんなことであって、思ったか
もしれないけど、ないようで、そんなこと
ってあるんだよね。変なきずが、そのコの学
校生活を抹殺してしまいうようなこと
が……」

すると、亜弥がテーブルの所まで来て、
赤ちゃんをベビーカーに乗せながら、

亜弥「私もね、似たようなコ知ってるよ。高
校の時、そんなコいたモン」

未央「……」

亜弥「私なんてね、彼氏と上手くいっていた
と思っていたら、何故だか急に喧嘩ばっか

りになってね。てつきりこの人と結婚するんだと思ってた。三年も付き合っていたし……」

結城「……」

○ 亜弥のアパート・中（亜弥の回想）

ワンスルームの部屋。

亜弥が携帯電話で、結城に電話を掛けているが、通じない。

亜弥の声「最後の二ヶ月くらいは、ろくに会わなくなつて、電話も通じなくなるし、それから当然連絡も取らなくなつた。そうなることは、わかつていたんだけどね。三年も付き合つたのに、どうしてくれんの？ つて、思った。酷く落ち込んだし、それに取り返しのつかない、こんなしょうもない男と関係を持ったと思つてる……」

○ ある喫茶店・中（夜・亜弥の回想戻つて）

三上・江口「……」

未央「……………」

三上「（小声で）誰がしよーもない男だ」

と、三上と江口が視線を合わせる。

亜弥「ただ、寂しさを紛らわせたかっただけ
なんだけどね」

友紀「……………」

亜弥「そしたら、子供できちゃって……………」

○ 池田家アパート・中（亜弥の回想）

一般的なファミリータイプのアパート。

泣いている子供をあやしている亜弥。

その傍らで、寝っ転がってテレビを見て
いる、亜弥の旦那の後姿。

亜弥の声「（続けて）どうにか結婚はしたんだ
けど、その相手も子供が生まれる前までは
良かったんだけど、いざ産まれたら、赤ち
ゃんは当然のように夜泣きわするし、お互
いの自由な時間まで減るわで、だんだんか
わっていったっちゃってね。全く子育てに参加
しなくなっちゃって、仕舞いには急に仕事

を辞めてきて、他にやりたいことがあるとか言い出しちゃって、そして家にいるようになったら、喧嘩が絶えなくなっちゃってね……」

○ ある喫茶店・中（夜・亜弥の回想戻って）

未央「……」

亜弥「そしたら、テレビから得た知識で、男関係のこと持ち出されて、俺のこなのかななんて言いだして、旦那どっかに消えちゃった……」

結城「……」

友紀「私も職場で、いじめられてるっていうか、パワハラ受けてんだよね……」

未央「！」

○ ある美容室・中（友紀の回想）

開放的な店内、お客さんの対応をしている美容師たち。

その中に、友紀の姿もある。

友紀の声「美容師なんて、給料安いし、立ち仕事だし、辞めたって、参入してくる若いコは多いし、換えは幾らだっているぞって感じだし。だから、お金貯めて、地元戻って美容室開きたいって思ってる。親にも早く戻って来いって、プレッシャー受けてるし。だから、仕事終わった後に、職場に黙って、時々キャバクラでヘルプで働いてる。そこで亜弥と出会ったの……」

○ あるキャバクラ・控室（友紀の回想）

ドレスを纏った亜弥と友紀が、楽しそうに話をしている。

友紀の声「（続けて）亜弥もエステティシャンしながら、時々ヘルプで入るぐらいだったから。境遇が似てたし、仲良くなるのも時間の問題だった」

亜弥の声「お互い職場でずっと働けるって、ことじゃなかったしね。次のことも考えなくちやならなかったんだよね……」

すると、急に笑い出す江口。(先行して)

○ ある喫茶店・中(夜・友紀の回想戻って)

友紀「何が可笑しいの？」

江口「自分たちだけ、大変だと思っ
ているだろ？俺なんて、結婚相手の方が給料いいし、その関係で相手の両親にも強く出られなくて、相手の実家に入らなければならなくなるし……」

友紀と亜弥「(クスツと笑って)……」

○ 江口の職場・中(夜・江口の回想)

上司のデスクで、説教を受けている江口、
何度も何度も頭を下げている。

掛け時計の針は、夜の十時を過ぎている。

江口の声「あり、笑えばいいさ、だから早く帰らなければいけないんだよ。それに職場じゃ、安い給料で長時間こき使われて、仕事を辞めようと思っても、そうそう次の就職は決まらないし……」

○ ある喫茶店・中（夜・江口の回想戻って）

三上「（フツと笑って）あんたまだマシだよ。

俺なんて、子会社に出向させられるわ、給料減るわで、住宅ローンも払えなくなるし……」

江口「!?!?!?!?!」

○ 三上家・前（三上の回想）

引越のトラックが発発していく。

独りただ立ち尽くして元マイホームを見ている三上。

三上の声「（続けて）せっかく夢を叶えて、一戸建て買ったのに、手放さなくちゃならなくなるわ、離婚するだの話になるし……」

○ ある喫茶店・中（夜・三上の回想戻って）

江口・友紀「……」

三上「当然キャバクラなんてのも、行ける身分じゃなくなるしね。（結城に）あ、この前

渡した名刺ね、前の職場のね。こんな時でも小さな見栄を張りたかったんだよ」

結城「……」

三上「仲間に裏切られて、可愛がっていた部下にも見捨てられてたんだよ。(未央に)世の中、上手くやり過ぎすには犠牲者を出さなければいけない。いじめられなくなかったら、いじめる側か、傍観者になるしかないんだよ。誰かを犠牲にしたくなければ、自らが犠牲者になるしかないんだ……」

未央「……」

暫し、いいようのない間があって、江口「結城さんはどうなの？」

皆の視線が一斉に結城に向く。

結城「俺は……」

友紀「はっきり言いなよ」

結城をじっと見る亜弥。

結城「俺も亜弥と結婚するのかなって、思ってた」

亜弥「……」

結城「三年も付き合っていたしね。自然とそ
うなっていくのかなって。でも、そんな時、
親父が倒れたんだ。脳梗塞でね」

マスター「……」

亜弥「何で言ってくれなかったの？」

結城「左側に少し麻痺が残ってね……」

○ 結城家・廊下（結城の回想）

バリアフリー化された廊下には、手摺り
が付けられていて、結城が父親の補助を
している。

左半身に少し麻痺が残った、結城の父親
の後ろ姿。

結城の声「（続けて）今でもリハビリをしてい
る。母親は大変そうで、だから仕事から帰
った後と、仕事が休みの日は、替わりに世
話をするようになって、余裕がなくなっ
てね。（フツと笑って）全てが上手くいかな
くなった。仕事も恋愛も……」

○ ある喫茶店・中（夜・結城の回想戻って）

亜弥「……………」

結城「何処かに、怒りをぶつけたかったのか
な？ ……そのバチが当たったのか、今更、
子供が俺のコかもしれないって、玄関先に
置いて行かれて……………」

友紀「……………」

結城「そして、元カノは浮気をしていて、し
かも、キャバクラでバイトしていたなんて
知らされてさ……………（フフッと笑って）も
う笑うしかないよね……………」

誰も結城につられて、笑う者はいない。

マスター「皆さん、そのくらいにしましょう。

美味しいコーヒー入れますから。これは私
の奢りです……………」

× × ×（時間経過）

それぞれに入れ立てのコーヒーが置かれ、
席についている一同。

マスター「これはね、しがない喫茶店のマス
ターの独り言だと思って聞いて下さい」

一同（マスター以外）「……………」

マスター「子供がね、欲しかったんだけど、
恵まれない夫婦もいるんです。それが私た
ちなんです」

亜弥「……………」

マスター「不妊治療をしていたんだけど、結
局ダメで、そんな時に私が体調不良に悩ま
されましたね。不妊治療でお金が必要だっ
たから、仕事も休めなかったんですよ。不
妊治療は保険が、ききませんでしたから」

友紀「……………」

マスター「早く医者に罹らなかったのが悪か
ったんですね。次第に、怠さと頭痛に苛ま
れました。その時には既に、腎臓がダメに
なっていたんですね……………」

結城「……………」

○ ある病院・中（マスターの回想）

透析を受けているマスター。

マスターの声（続けて）それから週三回の透

析が必要になりました。当然仕事も辞めなければならなくなつて、早期退職し、退職金でこの喫茶店を買ったわけです……」

○ ある喫茶店・中（夜・マスターの回想戻

つて）

三上「……」

マスター「透析は一回に三、四時間かかりますし、時間が融通出来る仕事でないといけなかつたんですね。私が透析の時は、奥さんにこの店を任せています。というか、（フツと笑つてから）今の時間、私がこの店を任せてもらっているってことなのかな？」

江口「……」

マスター「でも私は、前向きに生きています」

未央「……」

マスター「死んじゃありません。というか、死にたくはないのです。死ぬのが惜しいんですよ。何が何でも生きてヤルって思つてます。人にどう思われようが気にしません。」

プライドとかも捨てました。ただ、生きた
いのです……」

一同（マスター以外）「……」

○ 同・前（夜）

すっかり雨がやんでいる。

バイク便のバイクが止められている。

すると、友紀と未央が出てくる。

友紀「じゃ、何かあったら電話して」

未央「はい、ありがとうございます。それじ

ゃ」

友紀「それじゃ……」

友紀と未央がそれぞれ反対側に歩いてい
く。

すると、三上と江口が出てくる。

江口「三上さん、あなたのズバズバ言うところ、羨ましいですよ」

三上「だったら、見習えばいいだろ？ あん

ただって、言わないだけで似たようなこと
思っているんだろ。口に出さないだけの違

いだよ」

江口「（フツと笑って）まゝ、だけど、浮気し
といて、あの物言いには軽蔑しますけどね」

三上「（フツと笑って）……………」

江口「私は結婚したら、浮気なんてしません
から。それじゃ……………（と行く）」

江口の後ろ姿を見送りながら、
三上「んなこたないよ。男なんだから、つい
てるモンは一緒だろ？」

と、江口とは反対側に歩いていく三上。
バイク便の宅配員が出てきて、ヘルメッ
トを付けてから、バイクで行く。
すると、トートバッグを肩に掛けベビー
カーをひいた亜弥と、封筒を持った結城
が出てくる。

亜弥「会えてよかった、元気そうで」

結城「そっちこそ……………」

亜弥「それじゃ……………（行く）」

結城「亜弥」

亜弥「（振り返り）何？」

結城「これから、どうするんだ？」

亜弥「雨もやんだから、その辺でタクシー拾うつもりだけど」

結城「そうじゃなくて」

亜弥「（察してか）うん。このコは、私がしっかり育てていくから」

ベビーカーで寝ている赤ちゃんの寝顔。

結城「お、俺、……そのコの父親になってもいいよ」

亜弥「……」

結城「今更、遅いか……」

すると、亜弥がトートバッグから黄色い日記帳を取り出して、喫茶店の前に置いてあったゴミ箱にそれを捨てる。過去を捨てた瞬間だ……。

結城「!?!?!?!?!」

亜弥「私にこれ以上、背負わせないで……（と、行く）」

結城「!?!?!?!?!」

亜弥の背中を見送る結城、封筒を開けよ

うとするがそれを躊躇って、

結城 「……………」

結局、封筒を開けずにゴミ箱に捨ててから、亜弥とは反対側へと歩いていく結城。

(了)